

高校生活で養う課題意識・コミュニケーション力 これからの推薦・AO入試指導

2020年の大学入試改革においては、「学力の3要素」を測るために今まで実施されてきた推薦・AO入試の試験方式が多く採用されそうです。推薦・AO入試対策指導でよく出る質問について、藤岡氏が答えていきます。

Question

「総合的な学習の時間」の改革に取り組んでいます。これからプロジェクト型の学習を取り入れるにあたって、推進のポイントや考慮すべきことを教えてください。

プロジェクト型学習(プロジェクト学習、課題発見・解決型学習、ゼミ授業、探求学習など)さまざまな言い方がありますが、以降、PBL(推進における課題は大きく以下の5つといえるでしょう)。

- (1) フリーライダーの発生
- (2) 生徒の提案がありきたりになる
- (3) 進路につながらない
- (4) 評価・効果測定が難しい
- (5) 先生の意思統一が難しい

これまでの連載で触れてきた内容もありますが、推進してきた私自身の後悔も含め、改めて先生方にお考えいただきたいことを提案したいと思います。実はこの5つともに、乗り越えるためのポイントは、教員の意識改革にこそあると考えています。

PBLは期待された効果を発揮しているのか？

推薦・AO入試の拡大や高大接続・大学入試改革に向けて、アクティブラ

ーニングの名の下、多くの高校がPBLを実施するようになりました。私も2003年に当時、大学院生として通っていた慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスで実践されていた「プロジェクト」を高校教育に応用させ、課題発見・解決型キャリア教育やPBLの

高校現場での導入に努めました。高校現場は10年前に比べると相当、様子が変わりました。情報伝達型の授業から、教室でグループを作り、ディスカッションをする授業が増えました。ディスカッションのテーマは貧困や

格差問題から地域活性化などの社会問題まで。また、高校生が学校を飛び出し現場に出て、情報収集し、活動して、結果を周囲にプレゼンテーションする。プレゼンの聞き手は「このような学びが私たちの時にあれば」と目を細める、という状況が全国で散見されます。

PBL拡大に情熱を燃やしてきた私はさぞかし満足…と思われるかも

しませんが、実は、最近では後悔をしています。むやみにPBLを推進したことで高校現場を混乱させた後悔です。PBLを形だけ取り入れても現場は混乱するだけでしょう。先生方の意識改革が必須です。

**PBLを実施する
先生方の苦悩と課題**

PBLは本当に期待されていた教育効果を発揮しているのでしょうか。5つの課題は、PBLを実施する先生方へのヒアリングから浮かびあがってきたものです。以下、課題ごとに提言をしたいと思います。

(1) 主体性を発揮できない生徒が
フリーライダーになる

フリーライダーとはただ乗りの意味、作業を他の人に任せきり状態の生徒のことです。これは生徒がPBLのテーマに対して、当事者意識をもっているか、またチームワークに慣れているかによって決まります。

フリーライダーを生まないためには、生徒の当事者意識の醸成やチームで行うPBLに関する技術を身に付けさせることが重要です。そして、当事者意識の醸成には生徒の価値観や信念の言語化が必要ですが、そのためにはそもそも大人である親や教員が、自身の価値観や信念を言語化し、生徒に見本を見せる必要があります。

(2) 生徒の提案内容が毎回

ありきたりで予定調和になる

PBLで考える時はかなりの論理力と知識が必要になります。フィールドワークやヒアリング以前に必要なことは論理力と知識、つまり学力なのです。学力なくしてPBLを行うと、確かに一時的には生徒の主体性が発露する効果は見られますが長い目で見れば効果は薄い可能性があります。

(3) PBLで学んだことが

生徒の進路につながる

活動した事実はアリバイとして推薦・AO入試の出願書類に盛り込め

る効果はあります。しかし、生徒がPBLで突き詰めた課題やテーマが、質問とつながらなければ学部選択や大卒選びもできません。

生徒も教員もどの学問が、どのような内容を追求・探究するものか理解しなければなりません。経営学と経済学の違いあるいは文化人類学と民俗学の違いを、先生方は事例も含めて生徒に説明できますか？

(4) 評価軸がなく

効果測定が難しい

これは難しい問題です。なぜなら先生が個人で作られても意味がないからです。せめて学年、学校で協議をしながら評価軸を作成する必要があります。そのために、まず学年や学校で先生方の意識や理解を統一させることからスタートします。

他の先生方とのコミュニケーションは自身の教育観・学力観の理解から始まります。先生方は同僚の先生たちと教育観・学力観においてどこが違

うか説明し、議論することができませんか？

(5) 先生方の意見がまとまらず

バラバラになりがち

PBLの効果・意味・背景が置いていかれ、推薦・AO入試のアリバイ作りになるメリットだけが一人歩きしているうちは、まとめるのは難しいでしょう。ただし、そもそも論を語り合えない高校の働き方環境に問題があることも確かです。

教育改革は働き方改革とセットで

他にも多くの苦悩がありますが、

一体なぜ、多くの問題があるにもかかわらず、「働き方改革」が叫ばれる高校で、PBLが実施されるのでしょうか。その意味は何なのでしょう。

「意識改革が必要だと言われたって、時間が…」と思われるでしょう。まさにその通りです。考える、話し合う、学ぶ時間が先生方にはありません。

家族との時間を削って土日に学ぶ生もいるでしょう。しかしこれでは学校現場での差はさらに広がるばかりです。そこで私が伝えたいことは「教育改革と教員の働き方改革はセットである」ということです。余裕がなければ改革は起きません。

私の勤める大学では、教育目標をシンプルに定め、戦略的に時間と人的リソースの選択と集中を実行、教員がもつコマ数を減らしながら、余裕を紡ぎ出し、担当する授業の質を上げていきます。教員同士が議論できる関係性作りと時間作りに挑戦し、一定の成果を得ています。

たとえば授業数は2〜3割減り、授業の満足度が上がっています。課題となっていた退学率も激減しました。教育改革は時間がかかり、大変なことがちですが、経験から自信をもって両立できると言えます。

Answer

藤岡慎二
北陸大学教授
株式会社
Prima pinguino
代表取締役



ふじおか・しんじ●1975年生まれ慶應義塾大学大学院修了。数学や生物の大学受験対策を教える塾講師を経て、大学院でキャリア教育の重要性に気付き、研究を開始。小学生から社会人までを対象とした現場指導経験を有し、推薦・AO入試対策、社会人基礎力の指導や教材・プログラム開発を大手大学受験予備校や高校・大学で行う。島根県立隠岐島前高校をはじめとし、行政と協業し教育を通じた地方創生に取り組み、現在、北海道から沖縄までの高校魅力化プロジェクトに参画、高校連携型の公営塾を運営。